

あったかは一と♡

令和4年度の研究を終えて

本園の研究テーマ

私もステキ! あの子もステキ!

みんなのステキが輝く☆幼稚園を目指して

～インクルーシブな保育の〈援助の工夫〉と〈教師間の連携〉を探る～

今年度の研究では担任・副担任が双方の立場から同じ場面、同じ幼児の遊びのねらいや見取りを事例にして話し合うことを積み重ねてきました。その中で、幼児を多角的に見取りことができ、一人一人をより深く理解し、援助しようとする同僚性が高まったと感じています。

インクルーシブな保育については、障がいがある・無いに関わらず、『全ての子どもたちが大切にされている』と感じられる保育であり、幼児の肯定的な理解と、それを支えるチームワークが大切であることが分かりました。

今年度の事例で、特にインクルーシブな保育に近づけたのではないかとと思われる事例を一つ紹介いたします。

昨年のT児の夢中になる遊びを支えることで

- ・安心できる場所で、先生や少人数の気の合う友達と好きなことにじっくり取り組む
- ・穏やかな気持ちで過ごせる
- ・園が安心できる場になる
- ・T児が得意とすることを友達に認められる
- ・自分の好きな活動の中で友達との関わりが増える

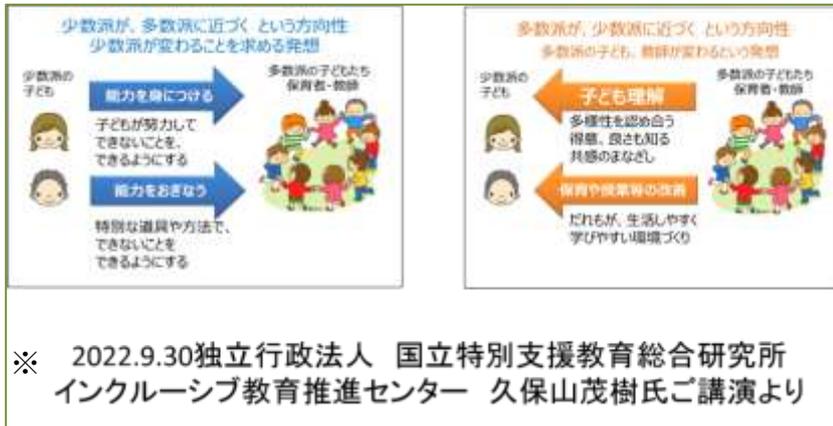
毎日虫発表を繰り返すT児

昨年の T 児は担当教師と一緒に遊び、好きなことにじっくり取り組むことで、穏やかに過ごせるようになり、幼稚園が安心できる場になった。さらに得意の虫捕りを友達に認められることで友達と関わる機会も増え、毎日虫を捕まえてクラスで発表することを楽しみに学級活動にも参加できるようになった。しかし、年長になっても毎日虫発表を繰り返す様子から、もう一步深く虫の世界を楽しみ、友達と楽しさを共有してほしいと願い、地域の『大人の虫博士』(札幌市立手稲中学校 教諭 佐々木彰彦氏)を年長組に招くことにした。

8月23日、虫博士が来園。『子どもが入るほどの大きな虫網』『木の上の虫も捕れる長い虫網』『虫集まるスプレー』などを使って虫を捕る様子や、子どもたちが捕まえた虫を、生きたまま顕微鏡で拡大して見せてくれたりするなど、虫博士の一挙手一投足にクラスの子どもたちは歓声を上げた。中でも T 児らは虫博士にリスペクトした結果、その後の生活の中で、蝶と蛾を捕まえるトラップ作り、甲虫や蛾などの標本作り、虫の夜行性を見る実験、蝶の越冬ボックスを作ったの様子を見る実験など、冬になっても虫について疑問に思うことを調べたり、試したりしながら追究し続けていった。以前は虫に興味がなかった幼児も T 児たちの追究する遊びに関心を寄せ、仲間に加わったり、応援してくれたりするようになった。T 児らが虫について疑問に思うことについて「虫博士に聞いてみたい」と言うたびに、教師は虫博士と連絡をとり、助言を受けながら T 児らのやってみることが実現できるよう必要な材料などを準備し、仲間として遊びを支え続けた。



11月16日、朝は園庭に薄氷が張る寒い日。この時の札幌の気温は0.8度。この日もT児は、土の中にセミの幼虫がいるかもしれないと言いながら林の土を掘っていた。偶然側に転がっていた朽木を割ったところ、クワガタの幼虫が出てきたが、その日はV児しか見つけることができず、T児は悔しい思いを胸に降園した。その翌日、T児はクワガタが見つかる前提で自宅から飼育用ゼリーを持参し、「ここにいる気がする」と白樺の木を剣先スコップで叩き始めた。教師は白樺の木にはクワガタはいないと予測し伝えたが、その後T児は白樺の朽木からクワガタの雄を発見し「ね、先生いたでしょ。これで白樺にもいるってことだね。」と伝えてきた。T児のこれまでの経験からくる感覚と思考は、大人の予想をはるかに超え、主体的な行動だからこそ生まれた深い達成感を味わう姿につながった。



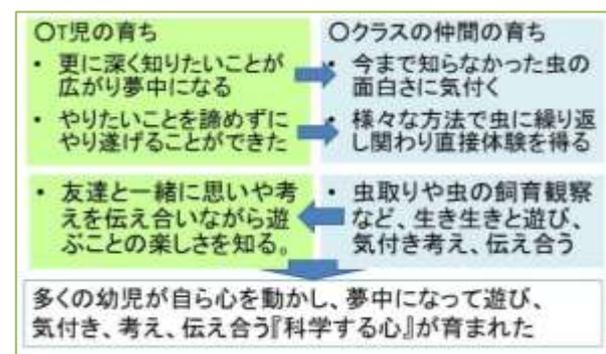
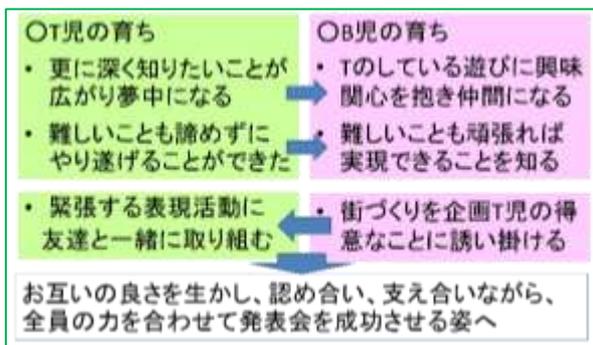
これまでは「少数派が多数派に近づくという方向性、少数派が変わることを求める発想」であり、少数派が頑張らなければならない状況だったが、「多数派が、少数派に近づくという方向性、多数派の子ども、保育者・教師が変わるという発想」が多様性を認め合い、誰もが生活しやすく学びやすい環境づくりにつながるという。(※)

物理的に近付くということばかりでなく、今回のように、T児が好きなものにクラスの友達が興味を寄せるきっかけをつくることができたことが、「多数派が少数派に近づく」という方向性になったと考える。では、その状況は多数派にとってどのような影響があったのか？

T児の夢中になる遊びを支えることで…

B児は虫に興味は無かったが、虫博士に出会い、虫への関心が高まり、標本作りをはじめとするT児の虫との関わり方に深い関心を寄せ、T児を褒めるようになった。秋が深まる頃、自分のやりたいことやイメージは豊富なのに自分からは言い出せず誰かの遊びに加わることが多かったB児が初めて「学級皆で街づくりをしてみたい」というアイデアを担任に提案してきた。担任は絶対にB児の思いをかなえたいと考え、実現するよう後押しした。B児は、あきらめずにやりたいことに取り組み楽しむT児の姿にも刺激を受けていたのではないかと担任は考察している。

初めてのことが苦手なT児は「街づくりはやりたくない」「何をすればいいかわからない」と躊躇するが、B児は「虫を作って虫博士になってお客さんと呼んだらどう？手伝うよ」などT児の得意なことを生かした提案をし、粘り強く交渉し協力し実現することができた。T児は更に自信を高め、その力を生活発表会でも発揮することができた。



今回の事例では『大人の虫博士』との出会いが『やってみたくなる環境』『ホンモノに触れる体験ができる環境』の大きなポイントとなったが、ここで願ったことは、幼児期に「詳しい知識を与える」ということではない。T児とクラスの仲間たちは、虫との関わりにおいて「様々なアプローチの仕方があること」「細部を見ることの面白さ」など出会わなければ知りえない面白さを得て、虫に繰り返し関わるようになっていった。重要なのは、T児の大好きな『虫』に周りの幼児が惹きつけられ、興味関心をもって関わり、

相互作用が生まれていることである。T児の夢中になる遊びを支えた結果、多くの幼児が自ら心を動かし、夢中になって遊び、気づき、考え、伝え合う、『主体的・対話的で深い学び』へとつながったのだと考える。

今年度の話し合いから見てきたこと

私もステキ! あの子もステキ!
みんなのステキが輝く☆幼稚園

もっと面白く・もっと楽しみたい
幼児の願いが高まる
誰かに伝えたい

教師

教師

一緒に面白がる
共通の目的

仲間の存在
認め合い

教師や友達に伝わると嬉しい
誰かに伝えたい

教師

教師

(一人でも)夢中になって遊ぶ姿

やってみたくなる環境
考えるきっかけになる環境
工夫の余地のある環境
ホンモノに触れる体験ができる環境

主体的に関われる環境

安心できる環境

教師

教師

教師

同僚性

保護者の理解

地域の理解

教師の援助のポイント

計画はありつつも、
幼児の発想や
動きに柔軟に
対応する

夢中になっていることや、
仲間の良さを
シェアする場を
大切に作る

教師も一緒に遊び
を楽しむ

一緒に面白がる・共感する
一緒に悩み失敗する

タイムリーに情報を共有し、
計画の多少の変更を許容し
合うなど柔軟に対応
し協力し合える
同僚性

子どもの興味関心に基づいて
繰り返し取り組む遊びの過程
や体験を重視する

主体性の共通理解

「どんな自分も受け止められ
ている」と全ての子どもが感じ、
安心して暮らせるように
するという願いの共有

最後に…

全ての子どもにとって夢中になって遊ぶ環境を作るということは簡単ではありません。しかし、一つ言えるのは、特別な教育的支援を必要とする子の夢中になる遊びに思いを寄せて環境を作ることで、全ての子どもにとって安心して遊ぶ環境となり、互いに理解し合い、認め合い、共に遊びを楽しむ仲間として育ちあっていくことができるのです。ただ、そこで忘れてはならないのは、特別な教育的支援を必要とする子は「特別な子」ではないということ。全ての子どもたちを笑顔にしたいという願いのもとに教師が存在していることを信じさせていくことも必要です。



ある日の帰り、歩行器で頑張って玄関まで歩いて来たS君を抱き上げグルグル回すと、「いいなー!S君だけずるいー!」という声が上がりました。「グルグルしてほしいの?いいよー!」と全員順番にグルグルしてお別れしました。一人一人を大切にする関わりが、友達同士がお互いを大切にする気持ちを育み「私もすてき、あの子どもすてき、みんなのすてきが輝く幼稚園」に近づくのだと考えます。

『インクルーシブ』な保育は

全ての子どもが『夢中になって遊ぶ』ための土台であり、

全ての子どもが『夢中になって遊ぶ』その姿こそが

私たちの目指している

私もステキ! あの子もステキ! みんなのステキが輝く姿 なのです!!

2023.2.10 本園において「科学する心を育てる」優秀園実践提案研究会を開催し、40名の方に公開保育を行いました。その中の感想を一部抜粋してお知らせいたします。

・子どもが面白いと感じることを深めていくことが学びの始まりなのだと感じた。また、子どもの発言、アイデアを聞き逃さずに取り入れていくことの重要性を感じた。子どもの発言、行動を見て、子どもは保育者の鏡なのだろうと強く感じた。

・先生たちが答えを言わず、子どもが自分で考えられるように援助しているのが凄いと思った。そして、いろいろな遊びがあり、子どもたちが飽きることなく遊びにずっと夢中で展開していく姿を見て驚いた。改めて子どもたちの意思や考えを大切にしたいと思った。

・援助や環境で最も大切なのは『自由』だと思った。幼児が自由に発想し、自由に物・人・事に関わることを許してもらえる環境が大切であり、それを受け止め、褒めてもらえる環境が大切だと思った。



こんなに自由にできるのは保護者の理解があってこそ…

今後に向けて

・幼児数の減少で、学年を超えた交流が増えていく。

今後は、これまで以上にクラス混合で互いの良さや

個性を知ることができるような教師間の連携、援助や環境構成についても話し合えるとよい。

・幼稚園と小学校で『主体性があると評価される姿のとらえ』が違ふと感じる。私たちが大切に育む主体性が小学校でも生かされていくようにお互いの教育観を知り合う必要がある。

・特別な教育的支援を必要とする子の遊びを支えたことにより周りの子どもがどう育っていくのか、どんな育ち合いをしているのかを更に深堀したい。育ち合いのための教師の援助や環境構成などが明確になるとよい。

※『担任ができる援助の工夫』については後日成果物としてまとめ手稲区の教育機関にお渡しする予定です。